2026年3月1日 主日礼拝メッセージ

聖書:エペソ人への手紙3章1～13節

説教:確信をもって大胆に神に近づく

はじめに

昔のことですが、「私はクリスチャンです」と伝えると相手の方から「キリスト教は外国の宗教でしょう」と言われたことがありました。確かにキリスト教は海外の宣教師の方を通して日本に伝えられたものです。聖書を開けばユダヤ人の救いのことが多く書かれていて、ユダヤ人でない私たちはそこをどう理解したらよいのか、とまどうことがあります。それは私たちだけではなありません。二千年前、地中海沿岸に住んでいた異邦人と呼ばれる人たちも戸惑ったし、またユダヤ人たちも異邦人が救われることについて戸惑いました。ところが、いま私たちは聖書を自分のこととして安心して読むことができます。それはなぜなのか。今日の箇所ではこの問題を取り扱っています。

１　奥義

１）いつだれが

そこでまず、ここに出て来る「奥義」ということばを見ます。このことばから皆さんはどんなことを思い浮かべるでしょうか。剣道や空手のような武道の先生から、秘密の心得とか技術を選ばれた弟子だけに教えてもらう。おそらくイメージが多い。聖書もそうなのでしょうか。

この奥義について二つの視点から見ていきます。一つ目は、いつだれが奥義を知るのか。二つ目は、奥義の内容は何か。

そこでまずこの奥義をいつだれが知ったか。5節。「この奥義は、前の時代には、今のように人の子らに知らされていませんでしたが、今は御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されています。」前の時代というのは旧約聖書の時代ことで、その頃は知る者がいなかった。しかし、イエス・キリストが来られて新約の時代になった今は、神が使徒たちや預言者たちに奥義を教え、その人たちがほかの人たちにも教えた。だから今では特別な秘密でも何でもない。そういうことになります。

２）奥義の内容

二つ目、では奥義の中身はなにかです。このことは6節に表されています。「それは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人も共同の相続人になり、ともに同じからだに連なって、ともに約束にあずかる者になるということです。」

まとめれば、ユダヤ人も異邦人もキリスト・イエスにあって同じ救いにあずかることができる。これが奥義の内容です。奥義と聞いて秘密の話が出るのかと期待した方には、肩すかしを食ったような印象を持つかもしれません。

３）パウロの苦難

しかし二千年前のパウロの時代はそうではなかった。当時、一般のユダヤ人は異邦人が救われるためにはユダヤ人と同じように割礼を受け、律法を守るべきであると主張していました。しかしパウロは、そのようなものは必要ないと説いたため、ユダヤ人側から厳しい迫害を受けることになり、町中が騒ぎになり、そのことで逮捕されローマに送られて裁判の場に引き出されてしまいます。13節で「私が苦難にあっていることで」とあるのはそのような事情があったからでした。

２　キリストイエスにあって

１）共同の相続人になる

ここで、6節に書かれている奥義の内容をもうすこし深く見ていきます。大きく三つに分けられます。まず一つ目。「共同の相続人になる。」ここの「共同の」と訳しているところは、元のことばでは「ともに」というのがある。ユダヤ人と異邦人はともに、一緒に、おなじものを相続する。相続財産という点において、ユダ人も異邦人も差別はないというのです。ではなにを相続するのかというと、「私たちは御国を受け継ぐ者となった」（1章11節）とありました。ユダヤ人も異邦人も等しく御国を受け継ぎます。

２）ともに同じからだに連なる

二つ目。「ともに同じからだに連なる。」からだとはどんなからだか。2章16節に「二つのものを一つのからだとして」ありました。これまでは水と油のようであったユダヤ人と異邦人はキリストを通して一つのからだとされました。そして一つとされたからだはどうなるかというと、全体が組み合わされて成長し、キリストのからだである教会が建て上げられていきます。教会においてはユダヤ人も異邦人もないということです。

３）ともに約束にあずかる

三つ目。「ともに約束にあずかる者となる。」どんな約束のことでしょうか。このことは、ぐっと時代をさかのぼってアブラハムのころにまでさかのぼることになります。アブラハムが自分の故郷を出てカナンの地にたどり着いたとき、主はこう言われました。「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える。」（創世記12章7節）この約束は、アブラハムがなにか善いことをしたから与えられたのではない。ただ主を信じる信仰のゆえに与えられた約束でした。ここで大切なのは「あなたの子孫」とはだれのことかです。これも二つある。一つ目は、文字どおりの意味でアブラハムを父祖とするユダヤ人のことを指します。ユダヤ人たちは、ここに異邦人が含まれるとはまったく思ってもいなかった。ところが「アブラハムの子孫」にはもう一つ意味があって、アブラハムの子孫として来られたイエス・キリストを指す。そこで初めてわかったのは、アブラハムに与えられた約束は異邦人にもともに与えられるといういことでした。

３　大胆に神に近づく

１）異邦人とはだれか

こうして、異邦人である私たちも安心して聖書を読むもことができるようになりました。しかしもう一歩進めて考えたい。異邦人とはだれのことかについてです。もともとはユダヤ人とは異なる民族を指すことばとして使われてきました。多くの場合それで話は済みます。しかしそれだけなのでしょうか。

聖書には、ユダヤ人でありながらさまざまな事情によって異邦人のような扱いを受けていた人たちがでてくることを思い出していただきたい。民族の違いだけでは捉えきれないもっと複雑な事情がからんできます。たとえば取税人レビのことを取り上げてみましょう。イエスがレビと一緒に食事をしたとき、そこに多くの罪人と呼ばれる人たちも集まっているのを見て、律法学者たちが腹を立てたということが福音書に書かれています。当時、取税人をはじめ律法に反することをしている人たちは、異邦人のような扱いを受け、口をきいてもらえず、町ですれ違っても目もあわせない。そんな扱い方をされました。イエスは、世の中からはじき出されたような人とたちを食卓に招いて一緒に食事をし、そのことでユダヤ人から批難された。これだけ見ても、異邦人というのはただ民族のちがいだけを言っているのではないことがおわかりでしょう。

もっと身近な例を挙げましょう。私はときどきこんな質問を受けることがあります。「家には仏壇があります。家族も仏式の葬儀で送りました。こんな私はクリスチャンになれるのでしょうか。私がクリスチャンになったら亡くなった家族はどうなるのでしょうか。」そんな悩みを抱えておられる方がいます。この方は、教会の玄関の前に立ちながら、自分は教会に入る資格がない、自分を異邦人のように感じているのだと思うのです。

しかし聖書はなんと言っていますか。12節「私たちはこのキリストにあって、キリストに対する信仰により、確信をもって大胆に神に近づくことができます。」キリスト・イエスにあって、異邦人もユダヤ人の違いはなにもない。ともに相続し、ともに同じからだに連なり、ともに約束にあずかる。家の宗教がどうだからとか、いままで別の宗教を信じていたからとか、そのようなことは心配しなくてもよい。そんなことはすでに神がご存じなのだから、あなたも大胆に神に近づいてともに一つのからだとされなさいと語ってくださるのです。でも気になる仏壇はどうなるのか。お墓はどうなるのか。心配は尽きないかもしれない。大丈夫。あとのことはすべて神がよくして下さる。そのことを私たちは何度も経験してきました。

２）この世に建てられた教会の役割

最後になりますが、こうして私たちはキリストのからだである教会に集められ、一つのからだに組み合わされています。その教会は、この世においてどんな役割を持っているのでしょう。小さな集まりだから、私たちには何の力もない、そんなふうに思うでしょうか。しかし、10節にこうあります。「これは、今、天上にある支配と権威に、教会を通して神のきわめて豊かな知恵が知らされるためであった。」天上にある支配と権威とは、いま世界を支配している人や組織、思想のことで、この世のことです。教会はこの世に対して神のきわめて豊かな知恵を知らせていく、そのような大切な役割があるというのです。もしこの世に教会がなかったならどうなるか考えてみて下さい。聖書のことばをだれが語るのか。教会しかない。もしこの世に教会がなかったなら、だれがイエス・キリストの十字架にある救いを指し示すのか。もしこの世に教会がなかったなら、この世の人たちはどこに真の希望と約束を見いだすのでしょう。教会以外にどこにもないのです。このような大切な働きを主は教

会に委ねて下さっている。ともに一つとされ、とも
に約束をいただいた私たちは、主イエス・キリス
トを証ししてまいります。